森の通信

ウータン

SAVE THE TROPICAL FORESTS

35
Hutan
1995年4月1日発行

ウータン・森と生活を考える会
〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

【一部】300円
【年会費】3000円
【郵便振替】00930-4-3880

PRINTED ON RECYCLED PAPER

「everybody on The 熱帯林！」

環境保護といってもアプローチの仕方は多種多様…
一人で始められることも沢山あるけれど、多くの人の
考え方に触れれば新しい方向性も見えてくるという
当り前のことを再認識しているこの頃です。

鈴木 鑑慈

【ウータン活動報告】

94・11・29 出前講座「熱帯林と紙のリサイクル」アベノ青年センター／西岡

11・29 「熱帯木材使用削減された今後の取組みの要望」を神戸NGO協議会とウータンで、宝塚、西宮、芦屋、川西市等7自治体に送付。

11・30 第6回熱帯材削減検討会議

12・12 西宮市回答「九四年度より複合合板使用を指導。また金属型枠等の採用も検討」

12・17 熱帯林連続講座②ソロモン編 ルーク氏等

12・26 川西市回答「九四年度の工事は特記仕様書に複合合板使用を明示。一三%削減」

95・1・16 第7回熱帯材削減検討会議

1・17 阪神大震災起きる

1・22 ウータン総会延期

2・1 出前講座「資源は海を越えて―熱帯林破壊が問いかけるもの」中央青年センター

2・10 熱帯林連続講座③インドシナ編 神田浩史さん

2・18 出前講座「マレーシアの森林破壊と日本」

3・7 第8回熱帯材削減検討会議

8・11 熱帯林連続講座④インドネシア編 猪俣栄一さん

森の通信 HUTAN 35号 目次

(CONTENTS)

・特集：阪神大震災から

ウータンREPORT 永田健一／荒木塚磨 ……9

廃材とガレキ処理は 話/山本達士 ……4

自治体キャンペーン・震災(西岡)……5

HUTAN NEWS 「暮らしの再建を」……6

話/三陽設計・岩崎真，民家・古賀俊介

・熱帯林を考える〔8〕 猪俣栄一 ……12

～南洋材開発輸入の軌跡(その1)～

・熱帯林連続講座・PartⅡ

『アジア・太平洋地域の熱帯林は今』

パプア・ニューギニア編(ペリ・カメオ)……7

ソロモン編(宮内泰介，ルーク・スイファシア)……8

インドシナ編(神田浩史)……10

・ウータン総会のお知らせ……16

・ウータンに届いたお便り…17 ・会計から…18

・ウータン・アート・ギャラリー…19 (奥野益子) ・スケジュール…20

阪神大震災から

未曾有の大震災が一七日未明に起こりました。多数の尊い人命と多大な被害にあわれた人々に、深い哀悼の意を心からお見舞い申し上げます。そして今回の地震から多くのボランティアの参加がありましたが、未だに就労、仮設住宅、ガレキ等の廃棄物、ガス・水道等ライフライン問題、行政のみの都市計画・防災計画・乱開発問題などが山積みです。

全壊した家屋から

永田　健一

今回の震災で注目を浴びたあの阪神高速道路横倒しの現場の少し浜側に、私の両親の住む家がありました。神戸市東灘区深江南町。

父親の話によると、小規模ながら酒造業を営み、江戸末期に建てられたという家は、度重なる台風や高潮に耐え、戦災からもまぬがれ、深江の町では最も古い家屋のひとつでした。

多くの老朽家屋が倒壊した中で、私の実家も近年増築した2階部分を残し全壊しました。

幸い両親は無事でしたが、報道されているように命が助かったのも紙一重でした。

地震に対して従来工法の木造家屋は弱く、ツーバイフォーやプレハブは大丈夫だとクローズアップされていますが、その工法の日本での年数が見落とされている気がします。

今、ウータンでも紹介しています建築家の三沢さん達は現場に出向き、家屋倒壊のデータを集め、今後の研究にと動いておられます。いつになるかはわからないが、私の実家も日本の風土あった工法による木造住宅を建ててもらおうと思っています。

リーダーのユイさん

荒木　琢磨

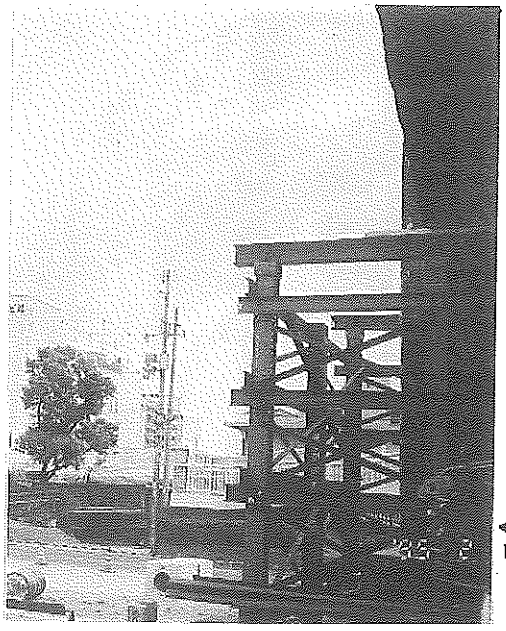
南駒栄公園には友達のユイさんがいる。彼とは、鷹取土曜学校（長田区）でベトナム人のこども達に宿題を見てあげるボランティアをしていて知り合いになった。

彼は、地震が無ければ東京に行ってしまうところだったが、適当な人がおらず今は公園のベトナム人のリーダーだ。彼がいないと話が進まないので、彼はほとんど公園から離れられない。

支援グループとの調整、公園自治会及びボランティア本部との調整、物資の仕分けと配布、職探しやいろんな手続きをする必要のある人の付き添い、公園の諸施設の掃除、風呂当番等、彼と彼を支える人々の手には到底負えない仕事がある。

今のところ、彼に収入はない。そんな彼を支えるのは信仰なのか、ベトナム人や日本人の仲間達なのかは知らない。

こんな人達が阪神間にはメッチャおる。私にとっては他人事ではない。たくさんの人が少しでも関わって、支えてくれれば、彼らの仕事は彼らにしか負えないのかも知れないが、何ほどかのことはあると思う。



（写真）
◀倒れた阪神高速道路と家の倒壊を防いだ樹（東灘区）

『緑が市民を守った！』日本造園学会によると、「樹木は倒れず、緑地公園は大半が避難所となり、長田区では延焼防止の役目をしたと。防災計画にもぜひ不可欠だ!!

廃材とガレキ処理は

Q：被災地からの廃棄物はすごい量で、約一三〇〇万㎥どうしたらえんやろ？

A：コンリクート、鉄、廃材等でここらへんでも想像を絶する量や。このガレキ処理を殆ど一緒で無分別にしてる。神戸のポートアイランド、西宮、宝塚で野焼き等が問題になってる。鉄とコンクリートをもっと分けられへんかな。

たまたま通りがかりでは廃材、鉄、家電などと分別してましたね。「業者によるね」と言うてたし、自治体での指導が必要。もう一つの大問題が仮設住宅がなかなか出けへんことや。

Q：廃材はパプア・ニューギニア材輸入量より多く約三二〇万㎥やて。

A：廃材含めて、ごみの置場がないのかもしれへんが、さっきの業者みたい倒壊した家はほる前やったらまだ分別は可能とちゃう。

阪神間の自治体は今年は直ぐに熱帯材使用削減しにくくても、せめて廃材、仮設住宅のリサイクルをしてほしい。

神戸NGO協議会・山本達士さんに聞く

図1—木質系建設副産物の発生から再利用までのフローチャート

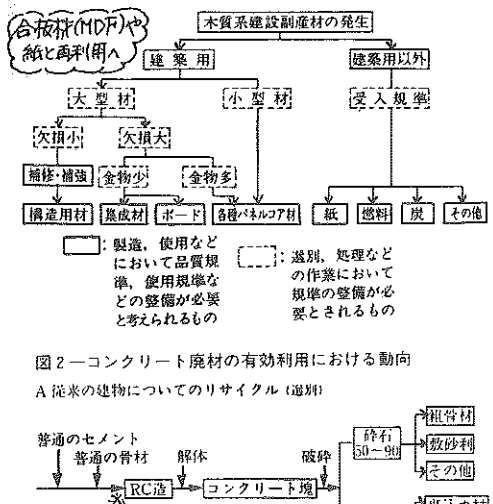
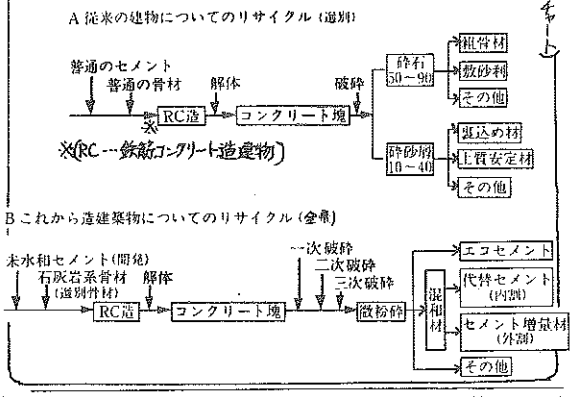


図2—コンクリート廃材の有効利用における動向



（建設廃材とガレキ再利用フローチャート）

仮設住宅の建設遅れ
業界に供給促進要請
国土など3省庁

3/2朝

政府は一日、阪神大震災の応急仮設住宅の建設を進めるため、国土、厚生、建設の三省庁とプレハブ業界の連絡会議を国土庁で開いた。今月末までに三万戸を供給する計画への協力を業界側に要請した。

国土庁によると、二月末までに完成した仮設住宅は約七千戸。今月末までに三万戸、四月末までにさらに一万戸を完成させる当初予定より遅れている。

合板に再利用を？
がれき1300万トン
当初見込みの倍
県外焼却へ破砕機導入を指導

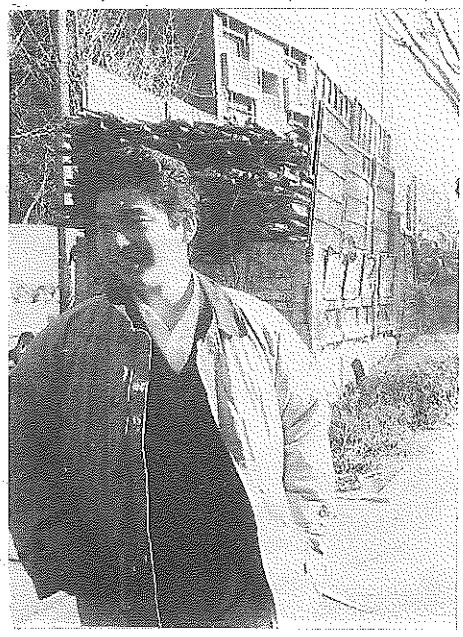
95.3/2 朝日N　兵庫県

阪神大震災の家屋倒壊に伴うがれきの発生量が、当初見込みの倍以上の千三百万㌧に上ることが、一日までの兵庫県の調べでわかった。このうち焼却処分が必要な廃木材は三百二十万㌧で、市町によっては自前の焼却場の処理能力を上回る。今後、さらに増える可能性もあり、県は破砕機を導入して細かく砕いたうえで、近隣府県に焼却協力を依頼するよう指導した。

県のまとめでは、災害廃棄物の発生量（二月二十日現在）のうち「住宅・建築物系」は千三百万㌧。各自治体が処理しなければならないのは、このうち大企業が自己処理する九十万㌧を除く千二百十万㌧。一月二十六日時点の調査では六百万㌧だったが、震災直後で倒壊家屋棟数と戸数の混同などがあったため再調査し、延べ床面積を基に推計した結果、大幅に増えた。

がれきは分別して仮置き場に運び込んだ後、コンクリート片など不燃物は、リサイクル分を除いて大阪湾のフェニックスセンターや、神戸市内の埋め立て処分場に搬入。一方、廃木材は埋め立て前に焼却処理が必要で、特に大型木材は仮置き場に収容し切れず、一部の自治体で野焼きも行われて問題化している。

山本達士さん（神戸NGO協議会）と
▼（写真）分別した廃材積みトラック（兵庫区）

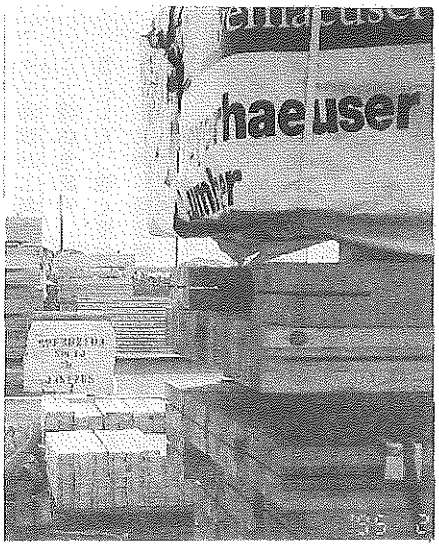


自治体キャンペーン・震災

昨年十一月末に、西宮、芦屋、川西、伊丹、宝塚、明石、姫路市へ「熱帯木材使用削減の取組み」を神戸ＮＧＯ協議会と共に問合せた。十二月末に、西宮市は「今年から複合合板等にする等」の回答。川西市は、「昨年から特記仕様書に基き複合合板に」との回答だった。

ところが、この大震災で約一五万戸が被災し、兵庫県林務課によると、復旧戸数を試算した木造数が三六五〇〇戸※。木材需要量は三年間で建設すると、約八五万㎥。さらに、鉄骨造、鉄筋造の型枠使用や仮設住宅等を大まかに見込めば、約二〇〇万㎥程になるだろう。そして、多量の廃棄物となる可能性が高い。

今後、今までの自治体キャンペーンと仮設住宅材の再利用案、さらに免震性をもち長持ちのＳＲＣ〔鉄骨鉄筋〕造も求められる。〔西岡〕



▲（写真）世界一の木材会社ウェアハウザー社（米国）やカナダ材等が仮設住宅の木材に（西宮市）

（95.2.16）日刊木材新聞

94年南洋材丸太輸入実績

産地	実績（千㎥）	前年比（%）	占有率（%）	前年比ポイント
サラワク州	4,463	− 9.3	65.6	− 0.6
パプアニューギニア	1,932	+10.1	28.4	+ 4.8
ソロモン	338	− 2.3	5	+ 0.3
ラオス	40	+200.0	0.6	+ 0.4
ミャンマー	22	−71.0	0.3	− 0.7
カンボジア	5	−77.4	0.1	− 0.2
計	6,802	− 8.6	100	—

（日本木材輸入協会）

廃材もサラワク材輸入量に近いんやな!!

ほんまはS造（鉄骨）のほうが一番型枠使用が少ないのやけど…

（95.1.31／日刊木材新聞）

※　復旧戸数（戸）県林務課の案

	神戸・阪神地域	淡路地域	計
木造	33,800	2,700	36,500
非木造	107,200	3,900	111,100
計	141,000	6,600	147,600

95/1/18

3年で住宅10―14万戸

兵庫県が再生計画　福祉施設と一体化

震災で倒壊した住宅の整備計画を進めている兵庫県は、十六日に開かれた「ひょうご住宅復興会議」第一回会合で、「住宅再生三か年計画」の基本方針を提示した。大量の住宅を早期に建設するとともに、災害に強い快適で恒久的な住宅の供給を図るのが目的。五月中旬の第二回会合で、計画案をまとめる。

それによると、九五年度から三年間で住宅十―十四万戸を建設。県、市、公団、公社などが積極的に供給し、被災者の所得や世帯構成を考慮して、負担は適正になるようにする。

早期着工できる臨海部の造成地や事業中のニュータウンなど「新市街地区域」で建設を促進、被災地では街づくりと一体となった計画を進める。景観や町並みにも配慮し、高齢者や障害者にも気を配った設計を採用するなど保健、医療、福祉施設が一体化した街づくりを目指す。

（川西市からの回答）

12月26日

川西市長

使用削減量は、６年度は１３％削減予定量につ

使用を特記仕様

基本方針」に基の使用を特記仕

（西宮市からの回答）

西環保収第７８号の１
平成６年１２月１２日

西宮市長

神戸ＮＧＯ協議会　草地賢一様
ウータン森と生活を考える会
西岡良夫様

西宮市長　馬場順三

「熱帯木材使用削減への取組みの要望」について〔回答〕

本市におきましては、建設工事における熱帯木材の使用削減施策といたしまして、１９９４年度よりコンクリート型枠について、新購入するものから随時複合合板を使用するよう指導しています。

また１９９５年度からは、全面的に複合合板使用することとしており、熱帯木材の使用は型枠に関して７５％削減されます。

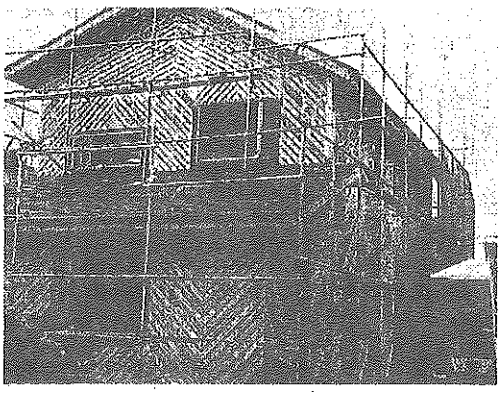
このほか、その他の代替材として金属型枠、ラス型枠、針葉樹型枠、打ち込み型枠等可能なものから採用することを検討するとともに、内装用合板、構造用合板（下地用を含む）について針葉樹合板の使用を普及させていく方針です。なお、民間の建設工事における熱帯木材の使用削減につきましても、西宮市建築業協会に対してその旨要請しております。

木造家屋は耐震度点検を

注目集める「TIP構法」

95.1.29 毎日新聞

阪神大震災で倒壊した家屋には木造の民家が多く、死亡した例でも木造家屋の下敷きになったケースが目立った。古い木造に住む人はいま一度、耐震度を点検する必要がありそうだ。



▲（写真）　TIP構法で斜めに下地板を張った建築中の家（約2倍にコストアップ）

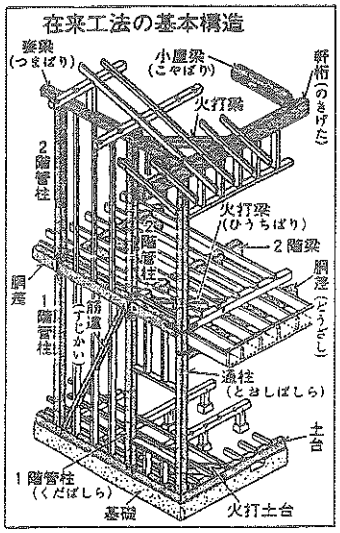
木造住宅の耐震性能は、建築基準法の改正によって戦後、三回強化されてきた。東北大学工学部災害制御センターの柴田明徳教授は「昭和二十―三十年代に比べると、昭和五十―六十年以降の家の方が、屋根を金属板ぶきにしたり、壁に筋かいを入れるなどの補強で、より堅固な耐震構造になっている」と話す。

一方、今度の大震災で「TIP構法」という耐震建築法が注目を集めている。昨年二月、同構法で木造三階建ての家を建てた兵庫県西宮市上ケ原十番町の公務員、稲田俊哉さん宅（三宅）は、トイレのタイルが少し傾き上がる程度の被害で済み、地震後、壁でつけも狂っていなかった。「工務店から勧められて建てた。関西では必要ないと思っていたが、助かった」と振り返る。

同構法を考えたのは東京工芸大学の上西秀夫教授。壁になる下地板を斜め四五度に張り、土台と柱、梁と柱の交点を、三角形の合板でクギを打って接合する。このうち筋かい部分の合板接合部には約二㎜のすき間を空けて、組れからつくる突き上げを防ぐ。震動によると、同構法だと木造住宅の耐震性を通常より二・六九倍に高められるという。

上西教授は「斜めに張ると下地板が筋かいとして働き、水平耐久力が増す。下地板を斜めに張ると耐震性が増すことは戦前から分かっていたが、手間がかかることなどから日本では普及しなかった。しかし、費用も通常とほとんど変わらなく、上下の揺れにも強い」と話している。

筋違が重要！



熱帯材は使わんといて！

（95.2.18）→毎日新聞だ。

阪神大震災で、十五万戸を超える住宅が全半壊したが、プレハブ住宅、在来工法の木造住宅のどちらが耐震性が強いかという論議が、ユーザーや業界の中で広がっている。専門家らの間では、「損壊した住宅は古い住宅が中心。工法による違いはない」という見方

改正基準法守れば差はない

＊三陽設計工務㈱・岩崎真氏

工務店を経営して建築に携わる者として、強く反省する事は、我々生産者側も発注側にも建築構造に対して、『甘え』と『楽観』があったのではないか。

機能性と経済性を追及する余り、かなり無理な増改築、構法、材料の選択をしてしまった関係者は数多いと思う。

今後は、建築にも人間同様『成人病』になる時期があり、ドッグが必要なことを消費者に理解してもらい、わが世の春を謳歌しているプレハブメーカーの暴走を阻止して、建築文化の伝統を次代にも引き継ぐ為にも、我々は基本の工法、構法、資材の選択等を改めて認識して、業務を行う必要の大きさを感じる。

＊建築事務所㈱民家・古賀俊介氏

現場調査で倒壊家屋を見ると、①壁の面積量が少ない家、②筋違（すじかい）がない家や誤ってた物、③開口部が大きいもの、④屋根が重すぎるもの、⑤老朽化した家だった。

今回の地震で「在来住宅が弱い」「2×4（ツーバイフォー）やプレハブが強い」と微視的に言うのはおかしい。但し、今後それらの良い面も採り入れる必要がある。

これからは、①せめても筋違を正しくとめる、②火打梁を増やす、③スレート屋根が良いが、土葺き屋根なら釘打ち用にする、④床の組みや壁組みに合板等を張る、⑤土台と基礎部は金属プレートで補強する、⑥壁量を増やす、⑦小幅板をちゃんと打つこと等がベターだと思う。

（文責・西岡）

〔報告〕シリーズ熱帯林連続講座PartⅡ――アジア・太平洋地域の熱帯林は今――

第1回 パプア・ニューギニア編

☆パプア・ニューギニアのNGOであるLDS職員、ベノ・カメオさんにお話を聞きました。LSDは一九七一年から活動を始め、農・漁業の訓練やそのハードの整備や技術の向上、環境破壊に関する啓蒙、識字の4つの活動を中心に取り組んでいます。今回の来日はPHD協会の招きによるものです。

ロッシング・ゲーム

ベノ・カメオさん（LDS職員）

一九七五年に独立したパプア・ニューギニアは、三六〇万人が住む、南太平洋のリーダー的存在の国です。「もう、遅いのかもしれません。」と前置きして、ベノさんは話し始めました。

「種の絶滅など、生態系の破壊は深刻です。私の住むパプア・ニューギニアでは、87%の人が森を基本にした生活をしています。20年前には、木をお金に換えるだなんて思いもよりませんでした。森は生活のパートナーであり、文化の一部であったのですから。」

「伐採業者は、インドネシアやマレーシア、フィリピンなどから来ています。60年代、70年代で樹を切り尽くした企業が、今、パプア・ニューギニアへと来ているのです。」

「伐採は、誰もの想像を越えた美しさを持ち、豊かな恵みをもたらしている森を破壊しています。それは生態系へのジェノサイドでもあるのです。また、伐採会社の末端労働者も、過酷な状況で働いています。」

「私たちは早急に、この方向を変えてゆかなければなりません。このロッシング。ゲーム（失うゲーム）を止めようではありませんか――。」

質疑に答えて、ベノさんは続けます。

「伐採は地元の経済的メリットにはなっていません。『仕事の口があるよ』というのはエサで、一部の人しか利益を得ていません。」

「伐採に伴う土壌の流出も深刻です。その上、川や海の水も汚染されています。漁業への影響は深刻です。」

「どうして樹をお金に換えるという概念になったのか。大きな流れで言えば、パプア・ニューギニア側からの持ちかけというよりは、外からの呼び掛けや依頼に応じていったということです。」

その後、5～6人のグループに分かれ、話し合いの時間を持ちました。ベノさんの話しを咀嚼する上で、有意義でした。グループの話しを受けて、ベノさんは答えます。「色々な意見の人がいます。お金が欲しい人もいます。あるいは自分たちで直接切って、お金にしようという人もいます。ですから、他の収入源を代案として示す必要があります。そしてそれがネックになっています。特に、もう切られている所では、そうです。」

「日本の、ごく一般の庶民にできることですか――知って、憤る、がスタート地点になるのではないでしょうか。そして政府と政府の関係に匹敵するグラスルーツ、草の根の繋がりが、長い目で見ると必要ではないかと思うのです。」

（まとめ・風）

第2回 ソロモン編

☆其の壱☆ソロモン通・フィールドワークばっちりの宮内さんに聴きました。

ソロモン材は日本へ

宮内 泰介さん（ＯＤＡ調査研究会）

「ソロモン諸島の暮らしは農・林業が中心で、人々はキリスト教を信仰しています。農業は基本的に焼畑で、二次林を切っており、伝統的な焼畑は原生林を破壊しません。」と、宮内さんのスライドが始まった。

「焼畑地へ植えるものは、タロイモ、ヤムイモ、サツマイモ、キャッサバなどです。島が小さいので斜面に多くの焼畑地が見られます。

伝統的な生活をする人々は、焼畑での農産物や木の実、トカゲなどの小動物を食べています。ところが最近、町から色々なものが入ってきています。その上熱帯林の伐採が進んでいるのです。特に目立つのが、サラワクの伐採会社です。」

ソロモン諸島の土地所有は個人所有がほとんどで、親族単位で共同に土地を持つケースが多い。そのため伐採会社は政府に許可を貰った後に、伐採の許可を得るのに地元住民と交渉すると言う。

「木材のほとんどは日本、あとは韓国等へも運ばれます。住民も、伐採収入があるので許可する人がいます。サラワクと違い土地の所有が丸ごと奪われることはないので、まだ伐採は食い止められているが、今後どうなるか。我々も問われている。」と宮内さんは報告してくれた。

☆其の弐☆ＰＨＤ協会研修生でソロモン唯一の養蜂家。環境破壊をしない経済自立を目指すルークさんに聴きました。

青い海と焼畑の島――

ルーク・スイファシアさん

「ソロモンと日本では生活が違います。私の故郷マライタ島は、青いきれいな海です。森もいっぱいです。二次林で焼畑をしています。英語でしゃべります。」

「自分を日本への有機農業の研修に行くよう推薦してくれたソロモンのＮＧＯ、ＳＩＤＴでは、村の人と一緒に学習したり、新しい収入を得る為のプログラムなどをしています。例えば、自分は蜂蜜を作って、ガダルカナル島へ六時間かかるのですが、そこへ売りに行っています。

最近、森に問題が起こっています。一つは伐採です。もう一つは、人口が増えて焼畑地のサイクルが短くなっていることです。自分は、森林伐採に対して危機感を持っています。」とルークさんからの報告だ。

参加者からは、養蜂での収入のことや有機農法があるかどうか、多くの人々が森林伐採に危機感があるのか、等の質問が出た。

森に依存する現状を直視し、森を破壊しないで収入を得る養蜂業を始めたことはすばらしい。ルークさんの当面の課題は、養蜂の収入を定期的なものにしてゆくこと。さらに、養蜂も含めた様々な形の有機農法が自分の住む地域に根付くことが大きな目標だ。

森との共存を目指す試みは、小さくとも確実に歩みを続けている。

●パプアニューギニアへの進出企業（●主要伐採権購入地）

オーブンベイ・ティンバー社〈晃和木材97%出資〉約22万ha，年間平均伐採量12万m³

ステティンベイ・ランバー社（SBLC社）〈日商岩井92%出資〉約40万ha，年間平均伐採量約28万m³

JANT社（本州製紙92.8%出資）約8万ha，年間平均伐採量（チップ）約17万m³

ニューアイルランド大塚ディベロップメント社（NIOD社）〈大塚家具工業99%出資〉（→撤退）

ダンフロギング&アグリカルチャー社〈外商50%出資〉（→撤退）

バニモ林区〈サラワク企業〉（ブンニングズ社，WTK社）

アンゴラム林区

西イリアン（インドネシア領）

セピック川

ラム川

マダン

マヌス島

ニューハノーバー島

ラバウル

ニューアイルランド島

新廻川ニューギニア社

オーブンベイ

ホスキンズ

ブーゲンブル島

ニューブリテン島

ブーゲンビル・フォレスト社

ブーゲンビル銅山

アラウェ・インベストメント社

国立森林研究所〈ODA〉

ラエ

ライ川

パプア湾

クムシ・ティンバー社

ウッドラーク開発公社

ウッドラーク島

ポートモレスビー

オクテディ銅山

ウワウカイ・グルビ森区

ボ・ティンバー社

コモンウェルスニューギニアティンバー社〈総武51%，パプアニューギニア政府49%〉（→撤退）

グッドウッド社

ガダイス林区

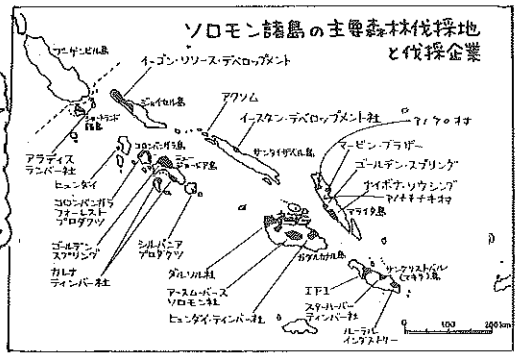
アンガス社

サンタ・インベストメント社

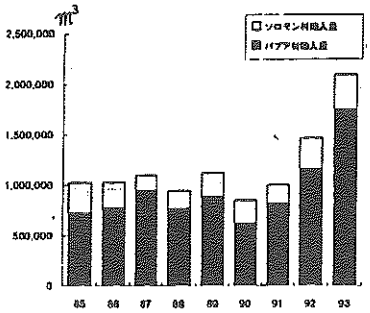
ブラウンリバー林区

注：リンブサン・ヒジャウ社やWTK社等はサラワク資本

●パプアニューギニアとソロモンの略図



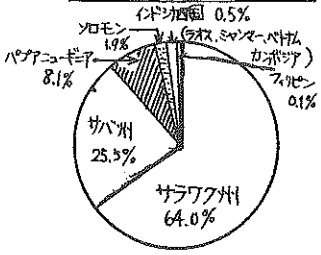
●パプア材とソロモン材の輸入量の推移



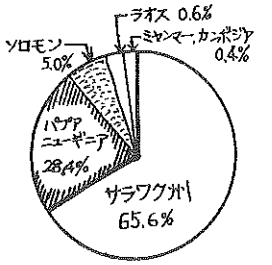
●日本の熱帯材（丸太）輸入率推移

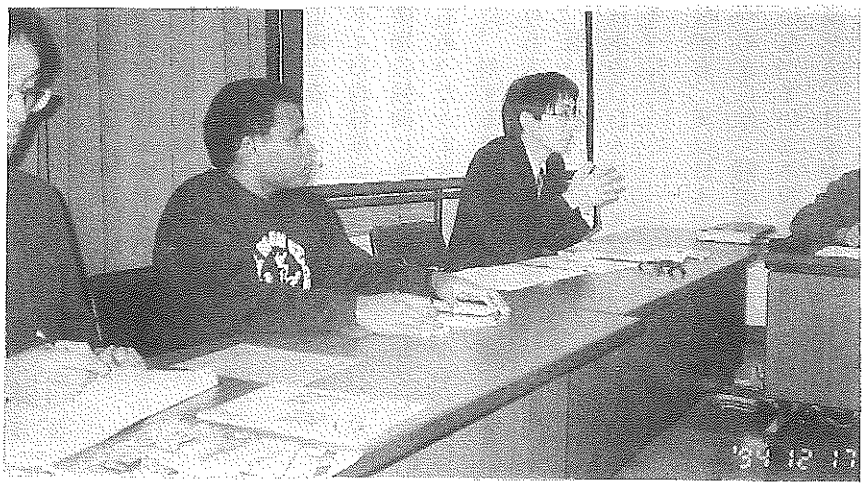
1991年→1994年

1991年度 総輸入量 10,114千m³



1994年度 総輸入量 6,802千m³





◀[写真] 熱帯林連続講座・第2回 ソロモン篇 宮内泰介さん(右)とルークさん

第3回インドシナ編

☆ メコン・ウオッチャー。ＯＤＡ（政府間開発援助）の偽善商売を鋭く指摘する、神田浩史さん（ＯＤＡ調査研究会）さんの話をまとめてみます。

☆ メコン河

『インドシナ』という呼び名は、仏植（フランス）民地時代の概念である。感じとしては、インドと中国の間の地、というような。現在はベトナム、ラオス、カンボジアという、それぞれ独立した国である。

メコンの雄大な流れは全長四二〇〇km。チベットから始まり中国の雲南、ビルマ、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム、と多くの国に跨がって流れている。メコンの巨大開発は、この地域の熱帯林の環境を大きく変えてゆく。

☆ モノから見えてくる環境破壊

樹を切ったら植えればいいという乱暴な考えの「ユーカリ植林」。タイ東北部のそれは、プランテーションへとすり変わっている。（ブラジルやパプア・ニューギニアでも同じ事が行われている）この手の「植林」を、日本のＯＤＡによってお金が貸しつけられた「種苗センター」がバックアップ。得意先は日本の製紙会社。（何とまぁ自己完結的な経済活動！）

アウトドアや焼き鳥で消費が上向きの炭。何処から来ているかといえば、シンガポール。マレーシアやタイからも来ている。汽水域に生えるマングローブは、炭となり、空輸されてくる。勿論、マングローブは原生林。

さらにエビの養殖が、マングローブの消滅に拍車をかける。台湾でもインドでも。そして東南アジアでも。

☆ ダム

日本のＯＤＡが、ラオスのダム開発を進めている。既に、幾つもの広大な森が沈んでしまった。（ダムに沈んだ樹木を船で採取する、水中伐採の会社があるそうだ。水に漬かった樹でも商品になる！）

ダムの為の道路建設で伐採が進む。段々とその道路の回りへと伐採が進む。広大な、むきだしの赤土の写真が痛々しい。

さらに重要な要素として、住民が移住を強いられることによる焼畑である。問題は不慣れな「焼畑」ではない。人の移動、それも望まない移動だ。人も、生態系の一部である。

メコンは行き来の場であり、生活に密着した河である。その生活を失うことを、全ての住民が望んでいるのだろうか。日常も森も、ダムの底に沈む――。

ちなみに日本のダムの寿命は50年から70年。ラオスのダムは、どのくらいもつのだろう。森の寿命よりも長いだろうか。

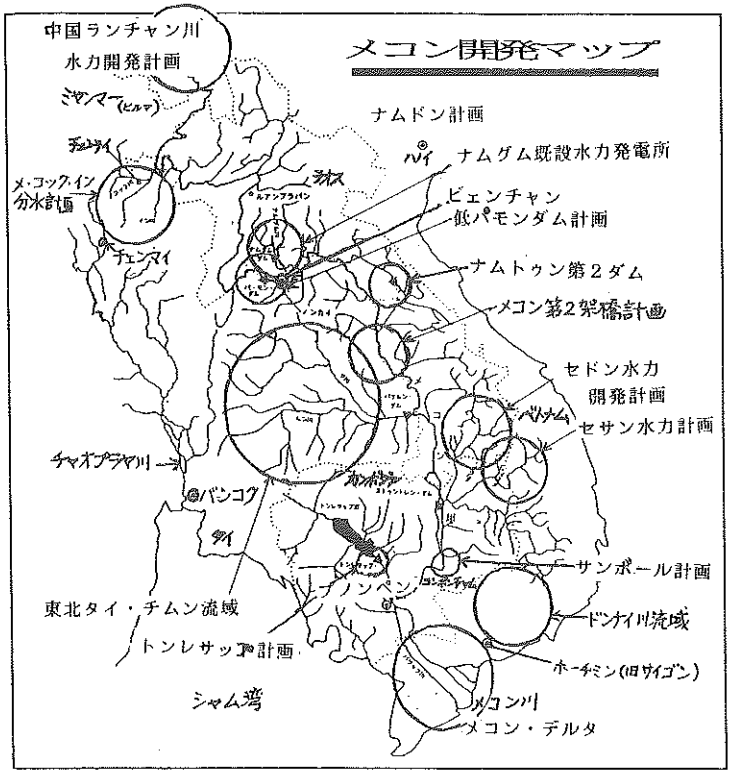
☆河と森とＯＤＡ

タイの森林率は、最少時期の20％台から微増の傾向にある。一九九一年には80％もあったラオスの森林率は、今や40％程に。対する日本は60％台。温帯の日本よりも太陽に恵まれた熱帯の森林率の方が、低い。

日本のＯＤＡは一年間で一兆二五〇億円。一人だいたい一万円。政府の金と言いながら、実は日本の庶民の金。それをいつのまにか一部の者のみが儲ける仕組みになっている不思議さ、腹立だしさ。

漠然と、日本が問われているのではない。私たち一人ひとり、財布の中をも事実が突き付ける。森の命から、アジアの庶民たちから・・・。

（文責・風）



【巨大プロジェクト・メコン開発】

世界の「開発」の眼の一つは、ベトナムを中心としたインドシナ半島に向いている。一九九三年、米国クリントン政権の下でIMF、世界銀行に融資開始をするや否や各国も一斉にベトナム等にODA供与を始めた。それは南沙諸島付近の石油開発とメコン開発だ。

一方、アジア開発銀行〔ADB〕もラオスに一七億円を融資し、ナムグム川支流にナムソン・ダムの建設を九三年から始めた。またナムグム・ダムは一五〇メガワットとラオス最大のダムになっている。その上ラオスとベトナム国境では、最大発電量六〇〇メガワットのナムトゥン第2ダム建設も始まっている。ラオス首都ビエンチャン近くではパモン・ダム計画があり、最大発電量二七〇〇メガワットという巨大ダム計画の事前調査勧告もなされている。これらを含めて、メコン川では約三〇のダム計画があり、メコン委員会87では今後十年間に二〇〇億ドル以上を要するとしている。神田浩史さんによると、バンコクを流れるチャオプラヤ川水系にコック川のダムから分水する計画もあり、巨大開発めじろ押しの状態だ。

その為、ラオス檜の乱伐や多くの強制移住政策が取られ始めていると言う。その上、メコン上流からの富養物がダムに遮られてしまう。農・漁業を営む人々には死活問題で、反対運動が起き始めている。

今年十一月十六日から三日間、大阪で開かれるAPEC〔アジア太平洋経済協力会議〕でも、資金繰りについて触れられるだろう。しかし、メコン開発は殆どタイ向けの電源開発計画であり、人々のためにならないODA供与は直ちに止めるべきではないか。

【2/25 メコンウォッチ・シンポから】

＊ラオス／ヴィポンサイさん

九三年に始まったナムソン・ダムで、下流では水の汚染と枯渇が始まり、農業者は生産が落ちて高地に移住しなければいけない。漁業者も魚が減って、新たな仕事を探す人もいる。

タイでは森が乱伐された後に、ユーカリが植えられたりするが、紙パルプという大規模開発につながるものだ。私達は村人によるコミュニティ・フォレスト確立を支援したい。

＊カンボジア／タックシェンさん

カンボジア人にとり、ダムや堰建設が農漁業に悪影響をもたらす可能性が高い。豊かな水は重要だ。悪影響をもたらす開発は止めてほしい。

（文責・函岡）

連載「熱帯林を考える」

8 南洋材開発輸入の軌跡（その一）

――熱帯林業は果たして林業だったのか――

徳島県熱帯林問題研究会・猪俣栄一

◎ 日本と南洋材のかかわり

私はこの連載をはじめるにあたり、予告のような形で「熱帯林問題へのアプローチ」と題する一文を『ウータン』27号（93年3月）に載せました。その中で、「林業とは何か。熱帯林業とは何だったのか」という問いかけをしました。そしてそれに対する答えは書きませんでした。通り一遍の定義みたいなものを書くよりは、この連載を通じて、読んだ方自身で考えて貰おうと思ったからです。

でも、その後の連載は、熱帯林のタイプとか土壌とか、樹種とか利用法だとかいう、基本的な堅い話、面白くない方向へと向かっていました。そして、やっと今回から私自身が投げかけた問いに私自身が答える段階となってきたようです。

長すぎた前置きをお詫びするとともに、我が国木材業界が南洋材の開発輸入にどう関わってきたのかということを簡単に振り返ってみましょう。

◎ 戦前の輸入形態と実績

第2回に書いたように、南洋材をごく広義に捉えて、香木や唐木類にまでひろげると、そのかかわりは奈良時代や飛鳥時代以前にまで遡りますが、それは別の機会に譲るとして、ここでは明治以降の近代型輸入の歴史にだけに限定したいと思います。

（1） 概況

明治の末から大正の初めにかけて、既に少数の日本人が南洋（蘭印、英領北ボルネオ、フィリピン、マラヤ、ニューギニア）に渡航して、現地人や、或いは当時のそれぞれの宗主国系の木材会社等から南洋材を買い付け、日本に輸入するという事実がありました。

この時代の日本人が何故南洋まで乗り込んで木材を買い付けたのかということですが、戦後のように、国内の木材需給が逼迫していたからとか、合板や製材原料として強い需要があったからとかいうのではなく、むしろその逆でした。日清戦争で台湾を手に入れたことにより、日本人の目が南方に注がれはじめ、さらに日露戦争を経て勢いづいた日本の膨張主義が一部の国民の熱気を駆り立て、新しい資源を求めて南洋という新天地へ向かう人が出はじめました。

しかし南洋には、英国、オランダ、そして新たにフィリピンを支配することになったアメリカの勢力と資本が根を張っていて、近代化、工業化に必要な鉱産物や、ゴム、ジュート、タバコといった重要農産物の分野に、出遅れた日本人が食い込む隙はありませんでした。そしてその人たちの目は、日本では見たこともないような巨大で直通な幹を持った南洋材――とりわけラワン材に注がれたのです。そのうえ、日露戦争に勝ったものの、三国干渉の煮え湯を呑まされた日本は、海軍力と商船隊の拡充に力を入れはじめて

いました。チークはもともと造艦、造船にとっての必需品だったのですが、彼等が目にした高級ラワンも、うってつけの造船材料だったのです。現に、本来のチーク（テクトナ・グランディス）の外に、上海チークと呼ばれる南洋材がそのころ既に造船用として日本に輸入されていましたが、この上海チークというのは、実はフタバガキ科のラワン材のことだったのです。

そういうバックグラウンドがあって、南方へ出かけて行った日本人は、南洋材を列強との間に競争のない重要資源だと考え、明治の末から大正の初めにかけて、日本へ輸入しはじめたのです。そのような事情ですから、日本国内には決してラワン材の需要や安定した市場があった訳ではなく、輸入した人たちは、販路開拓に追われる状況だったし、別にもうかった訳でもなく、南洋材輸入は細々と続けられていたという程度でした。

（2）　開発輸入のはじまり

以上のように、国の南進策気運に乗って個人や法人の雑多な資本が南洋へ出ては来たものの、先進欧米資本と競合しない南洋資源として探し出したという形ではじまった南洋材輸入が、陽の目を見はじめたのが、大正の中期からです。連合国側として参戦した第一次大戦は日本に好況をもたらし、また賠償として手に入れた旧ドイツ領南洋諸島は、国及び国民をさらなる南進政策気運へと駆り立てました。その結果、それまで細々と個人資本で行っていた南洋材の買入輸入も、次々に出資会社が見つかって法人組織になったり、元々会社組織であったところもより大資本のバックアップを受けて事業を拡大したりしました。

その結果として、従来は現地人や欧米資本から買い入れて輸入していたのが、やはり自分で伐採、造材もやらなければならないという気運がおこり、各地で次々と伐採権を手に入れて、長期的展望に立った本格的輸入へと変貌してゆきました。つまり、今日でいうところの開発輸入のはじまりであった訳です。

以下、第一次大戦前後から、太平洋戦争の激化によって南洋材の輸入が途絶するまでの間に、南洋各地に進出した林業資本と、それらが手に入れて営業したコンセッションの一例を見てみましょう。

（日本南洋材協議会編『南洋材史』輸入編第一章及び東京木材通信社『南洋材』昭和九年発行より抜粋引用）

（イ・林区所有者　ロ・取得または伐採事業開始年度　ハ・場所　ニ・面積ヘクタール）

イ・溝部長男（後のデブンコ木材）ロ・大正五年　ハ・ミンダナオ　ニ・一万

イ・今村栄吉　ロ・大正八年　ハ・ルソン島カシグラン　ニ・五万（後にスマギー木材となる）

イ・ボルネオ商会　ロ・大正九年　ハ・バリックパパン　ニ・五万六千

イ・雪本商会　ロ・大正十三年　ハ・バリックパパン　ニ・一万六千五百

イ・スマトラ木材洋行　ロ・大正十一年、同十四年　ハ・ランサン島、テビンテンギ島（いずれもスマトラ東岸）ニ・五万八千、五万

イ・比律賓木材輸出株式会社　ロ・大正十三年、昭和六～十二年　ハ・ルソン島、ミンダナオ島その他　ニ・十二万四千、六万五千

イ・タゴン商事（三井物産）ロ・昭和三～十四年　ハ・ダバオ中心のミンダナオ　ニ・六十六万六千

イ・南洋林業　ロ・昭和七～八年　ハ・サンクリラン、タラカン　ニ・四万九千
イ・ガルフ木材　ロ・昭和八年　ハ・ダバオ　ニ・十万
イ・安宅商会　ロ・昭和六年　ハ・ブツアン、ミンドロ、スリガオ　ニ・十一万五千
イ・ボルネオ物産商会（大正十年、前記ボルネオ商会の林区を引き継いだ）ロ・昭和九年　ハ・サマリンダ、ブラウ　ニ・十六万、五万
イ・住友商店（ギングー木材）ロ・昭和十年　ハ・ミンダナオ　ニ・六万
イ・岩井物産　ロ・昭和十年　ハ・ミンドロ島　ニ・九万六千
イ・北ミンダナオ木材　ロ・昭和十一年　ハ・アグサン（ミンダナオ）ニ・二万六千
イ・日産農林（久原鉱業）ロ・昭和三年頃　ハ・タワウ付近　ニ・三千七百

以上が概況ですが、この数字を見て驚くことは、現在に較べて当時の林区面積の広いことです。勿論チェーンソーなどはなく、板根の上まで二米（メートル）も三米（メートル）もの足場を組み、斧や鋸で切り倒し、搬出は大正末期に薪を燃料としたスチームドンキーが導入されるまでは、水牛による木馬（きうま）や人力（現在のクダクダ材）に頼っていたのですから、こんな広大な林区を貰った方もさることながら、与えた方も与えた方です。

紙面の都合で、これらの伐採会社の伐採及び対日輸出実績の詳細を掲載できないのが残念ですが、大正十一年から、戦争で南洋材輸入が途絶する昭和十六年までの輸入量合計は、別表の通りです。

この統計は重要な示唆に富んでいます。戦前でも我が国は結構木材の輸入国であったことが判りますが、大正十二年から米材、北洋材が急激な増加を見せ、以後数年間続いているのは、明らかに関東大震災とその後の復興需要とに関係があります。一方で、南洋材は、昭和六年を境に、戦時統制が厳しくなるまで、増大の一途を辿っています。これは合板産業の目ざましい発展がその要因なのです。

合板産業の鍵は、原料適材（原木）とともに、接着剤が握っております。一九〇五年にアメリカで開発された合板は、以後ずっと有力な接着剤を求めて苦闘してきました。「合板の歴史は接着剤の歴史でもある」と言われている程です。初期の獣膠からはじまって、カゼイングルー（牛乳タンパク）、タピオカ澱粉ノリを経、昭和初期に大豆グルー（大豆タンパク）が開発され、合板の大量生産が可能となりました。

我が国でも、昭和五年、それまで製法が秘密にされていたカゼイングルーに代わって、豊年製油、大鹿商店等によって国産の大豆グルーが市販されるようになり、特定メーカーに独占されていた合板製造業界は、誰でも行えるようになりました。それと同時に、それまで節その他の欠点が多い米材を使わざるをえなかった原木が、ラワン材という、大径、無節、直通のうえ切削容易という三拍子も四拍子も揃った南洋材が出現したのですから、合板産業は爆発的に拡大し、それに伴って南洋材の輸入量も増大した訳です。

◎　戦後開発輸入との比較

こうして見ると、日本の南洋材消費の歴史は、そのまま合板産業発達の歴史と表裏一体だったと言えます。そしてこの特徴は戦後にも引き継がれるのですが、ここで注意を要するのは、戦前はコンセッションの広さ、つまり蓄積量に対して

伐採量は微々たるものだったのに、戦後の開発輸入はチェーンソーだけではなく、土木機械の進歩も加わって、森林の破壊は較べものにならぬ程大規模になったこと、そして、それにもかかわらず日本の熱帯林業界の、熱帯林に関する生態学的知見は、戦前と何等変わらぬ程お粗末であったことです。

それともうひとつ、戦前は伐採権と引きかえに造林を義務づけられたことはなかったようですが、人力による択伐が林区面積の広さとあいまって、森林はそんなに傷みませんでした。それを考えると、戦後のネシア※など、伐採権と引きかえに造林を義務づけられながら、何等なす術もなかった熱帯林業の罪は大きかったと言えましょう。

〔つづく〕

〔別表〕　戦前の３大外材輸入実績

単位１，０００㎥

年度	米材	南洋材	北洋材
大正11	955	16	1，260
12	1，738	—	2，228
13	2，760	35	3，001
14	1，815	16	2，852
15	2，961	44	3，185
昭和 2	3，013	55	3，618
3	3，495	73	3，479
4	2，715	103	3，102
5	1，902	96	2，577
6	1，852	139	2，796
7	1，223	132	2，733
8	1，169	213	2，421
9	1，123	334	1，641
10	1，293	461	1，128
11	1，334	636	890
12	962	736	800
13	384	394	416
14	298	476	108
15	333	326	—
16	90	167	—
合計	31，415	4，452	38，235

注１・大蔵省通関統計
注２・前出『南洋材史』より抜粋作成
注３・北洋材には旧樺太・千島よりの移入を含む

参考文献（前出の引用文献の外）
高野　実　著『比律賓材話』昭和二年
（財）日本合板技術研究所『合板レポート』一〇一号
※　ネシア＝インドネシア

前号、前々号に校正不充分によるタイプミスがありました。お詫びして訂正します。

『ウータン』33号　15ページ中段
・誤「その東北に横たわるニューブリテン島やニューアイルランド島からなる群島が、ソロモン諸島と呼ばれ（ビスマルク諸島）、早くから」
↓正「その東北に横たわるニューブリテン島や東南に散在するソロモン諸島と呼ばれる島々で、早くから」

『ウータン』34号
10ページ
・レンガスの用途欄　誤「キャネット」
↓正「キャビネット」
・プライ用途欄　誤「天井寳材」
↓正「天井裏桟」
・カポック用途欄　誤「種子を含む」
↓正「種子を包む」
11ページ
・メンピサン資源量欄　誤「小～中」
↓正「少～中」
・ジュルトン主産地欄　誤「ボルネオ湿地種」
↓正「ボルネオ。湿地種」
12ページ
・メルサワ特性欄　誤「装材」
↓正「製材」
・アピトン特性欄　誤「害虫」
↓正「虫害」
13ページ
・アピトン科名欄　誤「ディラテロカルプス種」
↓正「ディプテロカルプス属」
14ページ
・ホワイトメランティ特性欄　誤「白メラン」
↓正「白メランティ」
・固い樹種特性欄　誤「その樹種」
↓正「どの樹種」
15ページ
・ホワイトメランティ樹種名欄　誤「マンガシオ」
↓正「マンガシノロ」
・〔後記〕の　誤「樹主別」
↓正「樹種別」

９５ウータン総会(案)　９５・４・２９／アピオ大阪

１．熱帯材使用削減、自治体キャンペーン等

１〕自治体キャンペーン

①90年末から始めた自治体キャンペーンは当初の目標以上の成果／府下45自治体中22自治体が熱帯材使用削減に取り組む－その中でも府、吹田、豊中、堺、守口は本格化

②神戸ＮＧＯ協議会と阪神間等７自治体に削減を進めるよう依頼／94･11･29質問発送

③削減検討会議準備会へむけ昨年４月から関西の熱帯林グループと会議

④今後の自治体キャンペーン

ｉ〕大阪府下の自治体に対して、今後も熱帯材使用削減を拡げる

ii〕「特記仕様書」が削減に有効であり、これをすすめると同時に、下地材等の見直し

iii〕関西のグループと一緒に、近畿圏の自治体の動向を調査し、削減を求める

２〕熱帯木材使用削減検討会議の活動骨子予定（近畿のグループ等で）

①土木業・大規模建築に関わる熱帯材削減提案　②家庭住宅建築への削減提案

③家具に関する熱帯材削減提案　④国内林業の現状・将来性の調査、関係作り

⑤国内法制度の検討・代替案の提示　⑥廃材の再利用調査・検討

⑦消費者へのアピール・宣伝　⑧ブックレットの作成

２．行事の企画

１〕熱帯林連続講座

①連続講座part２「アジア･太平洋地域の熱帯林は今」

ｖ〕4.15 フィリピン／関良基、青木恵美子さん　vi〕5.20 熱帯林と日本／荒川純太郎さん

②連続講座part３「暮らしの中の熱帯林」〔仮題〕－－私達の生活を考える

ｉ〕家、建築物　ii〕家具

iii〕紙　iv〕海を越える資源と熱帯林破壊

ｖ〕廃材、ごみの行方　→→新会員、新スタッフの獲得・定着化を目的とする

２〕夏の行事－－レジャー、心の洗濯などのため

①ハイキング・野外観察会〔６月４日〕春日山

②枝打旅〔８月末頃〕－－丹波大山町で、ＰＨＤ協会主催で

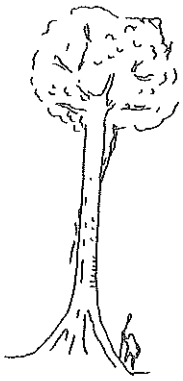
３〕内部学習会－－昨年９月からの学習会の継続／第２火曜日午後７－８時

☆スタッフの質の向上のため、家具、建築物、サラワクの現状等について

３．ウータン・リーフレットの第２版作成、家具リーフレットの作成

☆家具アンケートを行いながら、家具リーフレットを拡げる。

家具リーフレット作成は５月中に



４．広報・宣伝

①出前講座を拡げ、熱帯林保護のＰＲ、

②家具調査等や自治体キャンペーンのＰＲなど

５．環境開発教育－→他のＮＧＯ、自治体、学校教育での取組みを

６．スタディツアー化

７．通信－－年４回／３月、６月、９月、12月

８．予算

９．中長期計画（２～４年）

１〕自治体キャンペーンの拡大　２〕家具調査と長持ちする家・家具の模索

３〕連続講座part３以降の取組み　４〕阪神大震災の廃材・仮設住宅再利用等の模索

５〕針葉樹破壊調査研究－－93年からの課題　６〕スタディ・ツアー化

総会におこし下さい。ご参加の際は、今号をご持参して下さい！

ありがとう THANK YOU! 届いたお便り

元気です！

会員からのおたより（敬称略）

事務局の者が直接お電話などで無事を確認出来た方以外の、被災地区の方に、往復葉書でご様子をおたずねしました。

……

お見舞ありがたく存じました。（中略）自宅は5年前に鉄骨造に改造したため家族も傷ひとつ受けず幸運でした。（中略）無事だったのは大きな地割れの上になかったのが第一の理由と思っています　庭に小さな地割れが走り2cmほどの高低差が起きています。パプア・ニューギニアが木材輸出をやめたニュースを喜んでいます。

宝塚市　谷口平一

（前略）震源に近かった割には塩屋町は揺れが少なく、室内の物がこわれた程度ですみました。2／5には水道が使えるようになり、水運びの重労働から開放されてやれやれです。ガスは相変わらず出ませんが、近所の商店などはもうほとんどが開いており、その点でも不便はありません。わずかな距離の差で、ひどい被害にあわれた方々のご心労いかばかりかと思うとやりきれない気持ちです。

神戸市　上田真弓

わが家はなんとか倒れずにすみましたが、西宮市内の旧い家屋や文化やアパートは物のみごとにつぶれています。死者や避難者の状況を見ても、震災はビンボー人を直撃するものです。（中略）

倒壊による膨大なガレキとともにボウ大な量の廃材が発生し、あちこちの集積所で野焼きされ黒煙となってたなびいています。同じ量の森材が伐採され自然が破壊されると思うと暗たんだる気持ちになります。

西宮市　藤岡正雄

（前略）わが家は修理してすめる程度というところでしょうか。玄関は全体にゆがんでいますし各部屋の損壊はございますが（私共老人の二人住まいですが）二人共にその時間にはそれぞれ犬の散歩をすませて帰宅してきたところで起きていたことが幸いしたようです。未だガスと水道が通りませんので多少不自由ですが、その他は皆様の善意で満ち足りており感謝でございます。ありがとうございました。

西宮市　伊東万千子

（前略）先月（一月）末より西宮へ個人でボランティアに行っています。建物のとり壊しは市がやってくれるもののそれまでに家財道具一式どこへどうやって運び出せばよいのか、なかなか悩ましい問題です。

他国の犠牲の上に神戸の復興がなされなければよいのですが…。

新たなる試練と実験の場となるでしょう。ウータンどうかくり返しお誘いください。

（西宮から生駒に越された）今村直樹

（前略）神戸では震災直後は水、食料とも入手できない状態でしたのでこちらから毎日物資を運んでいましたが、それも今はほとんど必要がなくなりました。

……今後も自分なりに出来る限りの支援をしてゆくつもりです。

兵庫県加東郡　野見山健一

＊このほか、津名郡の石上リカさん、尼崎市の渡辺康之さん、神戸市の西村和則さん、助友伸子さん、西宮市の樋野道子さんより、ご無事とのおたよりをいただいています。
神戸市の加賀さんは家が全壊で引っ越されたとのことです。

＊今回はその他多くの方よりお便りを頂きました。年賀状、おハガキ有難うございます。今後もよろしゅうに!!

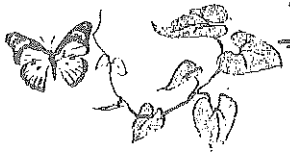
［会費・カンパをいただいた方］（敬称略）
3月6日まで　振込分

足立節雄、荒川純太郎、ロニー・アレキサンダー、飯高　輝、石中英司、石丸千里、一鷹要市、伊藤哲男、伊東万千子、井下秀子、上田真弓、鵜川まき、馬谷憲親、梅尾文子、大田伊久雄、太田敏一、大田博美、大沼淳一、大東　弘、岡市志奈、岡本昭子（グループ地球人）、小川輝樹、越智清光、加賀寿子、笠原英俊、樫本慈弘、春日直樹、春日美恵子、加藤昌彦、鏑木里子、河添純子、康　由美、北阪英一、北村千枝子、倉友克美、後藤利恵、小堀直子、五味義明、阪野修、雑草舎、佐野徳子、志儀真由美、下山久美子、菅原玲子、助友伸子、高橋敬一、竹内新作、柳田明宏、谷　一能、谷口虹人、田中美智子、千代延明憲、寺田武彦、富崎正人、中尾卓司、永田展雄、なかつかゆきのり、中院彰子、中村尚司、新作裕子、西川美江、西谷陽子、西村和則、西村照男、野見山健一、橋本崇央、長谷川有機子、畑　章夫、畑健次郎、馬場清、林　良二、樋野道子、深町加代子、福田敦、藤村はるえ、堀口和恵、本田次男、本領宏子、松井やより、三澤文子、湊香代子、向井千晃、明周正和、望月敏子、森みどり、ジョアキン・モンティロ、山内　智、山口八千代、山田光一、山田睦美、山本紀子、湯上義一、由良行基周、横田憲一、吉田　隆、米沢興治、和田善行、中島紘、松尾光雄

ウータン・から

昨年も皆さんの暖かい応援のおかげで何とかやってこれました。どうぞこれからもよろしくお願いします。
94年度会計は下記の通りです。

（会計・井下祥子）



会計から

今回の大震災で大きな損害を受けられた方については、95年度会費を頂かないこととしますので、お知らせ下さい。既に払いおえてしまった方については、96年度分の会計とさせて頂きます。（井下）

ウータン　９４年度　会計報告

収入

繰越金	３２２，６４７
会費　@３，０００×１４９＝	４４７，０００
カンパ	９１，８１０
物品販売	１１３，９３０
パネル等貸出料	８，０００
講師謝礼	３４，７００
講座・集会参加費　（６回）	１０７，０００
計	１，１２５，０８７

支出

会報・チラシ等製作費	１８８，０８９
郵送料	１７３，９３１
事務所家賃　１０，０００×１２＝	１２０，０００
連続講座　講師謝礼	１２２，０００
会場費など	９６，０００
雑費	３４，０５８
物品原価・仕入れ	５１，６９０
次年度繰り越し	３３９，３１９
計	１，１２５，０８７

ウータン・アート・ギャラリー 14

HUTAN ART GALLERY

『エンピツの森』

【作】奥野益子（おくのますこ）
MASUKO OKUNO

◈イラストレーター（大阪府泉南市在住）
1960年 泉州の玉ねぎ小屋で奥野家の人に発見される。最近・富士山麓に宇宙人の母ありという説も……きのうの夢の話かも知れないが。天からのメッセージを"益"として伝える仕事、イラストレーターの職を授かる。
前世ボードレールの友人もいる大阪をゴールドにぬりかえようとしている。（原文のまま）

◈ウータン・アート・ギャラリーは今号でおしまいです。多くの作家方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。紙面で申し訳ありませんがここに深く深く感謝いたします。ありがとう！ Ⓝ

HUTANから：

① 阪神大震災へ環境ボランティア計画中
～ボランティア登録者募ります！～

・自治体キャンペーン等も熱帯材使用削減へは重要ですが、震災で倒れた家がまだ多く、無分別になって、廃材、家具、家電製品が捨てられたり、野焼きされています。それで、「ごみ」問題のグループや神戸のNGOと一緒に家の解体→分別（冷蔵庫のフロンガスも対象）してみようと計画中です。どれだけできるか、調査し、行政に働きかけるために行います。3月～5月頃！おってTelします！
［とりあえずの連絡先　西岡まで／0722(52)0505］

② その他の震災ボランティア
1. YWCA（06・361・0838）　振替口座 00990-4-46234
～「心のケア」のための救援金を～
2. 大震災被災地の人々を応援する市民の会
［略称NPO応援団］（0797・32・1306）
～ボランティア何でも～
又は
3. 地元NGO救援連絡会議
（078・362・5951）

HUTAN ACTION SCHEDULE

［参加費］800円

熱帯林連続講座・PartⅡ

『アジア・太平洋地域の熱帯林は今』

・4月15日(土)午後6～9時
第5回 フィリピン篇［ゲスト］関良基さん（京都大農学部・院生）
青木恵美子さん（自由学校大阪スタッフ）

・5月20日(土)午後6～9時
第6回 熱帯林と日本［ゲスト］荒川純太郎さん（アジアに学ぶ会代表）
～サラワクと私たち～

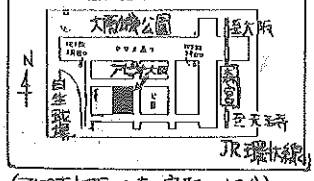
［問合せ］Tel 0722(52)0505 西岡まで

4月29日(土) ウータン総会

午後1時～4時
内容 1. 自治体キャンペーン
2. 行事の企画
3. 家具
4. 中長期計画
5. 予算
などを決めます！

熱帯林連続講座も総会もアピオ

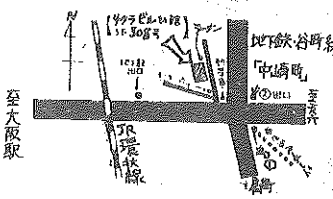
Tel.(06)941-6332
（場所）アピオ大阪
（JR環状線、地下鉄中央線森之宮駅下車西へ3分）



（アピオ大阪は森の宮駅より2分）

6月4日(日) ウータン・ハイキング ～奈良・春日山原生林へ～
午前10時／近鉄奈良駅・前方改札口集合（雨天は万葉植物園へ）
［問合せ］Tel 0722(52)0505 西岡まで　―弁当、水筒等持参を！―

［ウータン事務局］



●ウータン定例会は、第2と第4火曜日午後7時半から、「関西市民連合」事務所（上記地図）にて行っております。TEL・06(372)1561まで。

熱帯林の破壊を食い止め、未来の森を育もう！

スタッフ募集中です！

ウータン・森と生活を考える会　篠宮 早苗

私たちの会は、関西の有志が「熱帯林の破壊を食い止めるんや」と集まったグループで、発足したのは一九八八年六月。

大阪府下の各自治体にアンケートを送ったり、何回も話し合いを持ったりしてきました。

そんな地道な活動が徐々に実り、今では府下の半数以上の自治体が「熱帯の樹を材料にした木材を浪費しない」建築方法に取り組み始めました。

同時に会報や学習会などで「なぜ日本は、大量に外国の樹を切り、環境を破壊し続けるのか」を考え、問い続けています。学習会のテーマは尽きません。

今後は、家具など、建築分野以外の「熱帯の樹の浪費」にも目を向けていこうと話し合っています。

年会費三千円を振り込んで下されば、どなたでも参加できます。会員は関西圏の一般市民が中心。皆さんの入会をお待ちしています。

〒530 北区中崎西一六一三一六
サクラビル新館308
自然を返せ！関西市民連合気付
☎（372）1561（火曜日7時以降のみ）

伐採された熱帯雨林の木材は、先進国へ。（マレーシアで）

（事務所はここです）

編集後記

地震で、「市民連合」メンバーの坂田雄君も亡くなった。私の自宅の柱もひびが入る強いものだった。関西では今、地震問題ぬきに考えることは難しい。「自治体キャンペーン」だけでなく、「廃棄物」「再利用」問題も考えなあかん。それと資料という"紙地獄"の生活も。（西岡）

好評だった「ウータン・アート・ギャラリー」の続きは「ウータン・フォト・ギャラリー」です。